

台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に

関する一考察(四) — 図・像を中心に(二) —

安部 力

はじめに

本稿は、前三稿(1)に引き続いて、現代の台湾(中華民国)の人々、特にカトリック・キリスト教信者の持つ「宗教意識」を探ることを目的として行なった、現地調査の報告である。

これまでの研究報告においては、現地での聞き取り調査、宗教関連文物・建築様式及び装飾(品)などを取り上げてきた。現地調査における調査項目そのものに大きな変更点はないが、従前からの調査過程で、いくつかの項目(テーマ)別に報告をまとめる方が、より現在の台湾キリスト教が置かれている状況、そこに見られる「宗教意識」の特徴が明確になると考えたため、本報告では、前稿作成後に得た新しい知見を加えながら、台湾におけるキリスト教の現状を浮き彫りにしていくこととした。また、本報告では、主に、訪問した各教会に見られる「図・像」を中心にしながら、教会関連文物などにも適宜言及紹介していくこととする。

一、「図・像」を中心に取り上げることについて

現代の台湾キリスト教における「図・像」の問題に関しては、これまでも「天后聖母」という称号、及びマリア像などを取り上げた際に言及してきた(2)。本稿もそれらの関心の延長線上に、新しく得た知見を加えながら紹介・検討するものであるが、ここで、キリスト教における「図・像」の位置づけ、またアジア地域における「図・像」の取り扱いを歴史的に振り返っておきたい。

まず、キリスト教が、その発祥地である中東地域から地中海地域を経てヨーロッパに伝播する際、各地域の土着信仰と習合・融合し、また包摂・従属させてきたことは夙に指摘されているし、その痕跡が「図・像」として現れていることも紹介してきた(3)。

そのようにして包摂、習合した様々な要素が、キリスト教がヨーロッパ世界の文化的基盤として定着した後、一六世紀の大航海時代を迎えて世界に拡大する際に、大きな意味を持つことになるのである。例えば、本稿で扱う「図・像」、特に「聖母マリア」に関して言えば、若桑みどり氏が次のように言われている(4)。

十六、十七世紀において、世界システムの「周縁」各地における宣教に、キリスト像以上に聖母像が効力を発揮したのはなぜか。聖母像は、さまざまな土着の文化と習合してそれぞれの人種的、民俗的変形を遂げ、民心に浸透した。その理由は、聖母がアジア、アメリカ、アフリカ等の「周縁」地域において、その基層に存在する大地母神信仰を呼び起こし、これと呼応したためである。カトリック教会は半ば戦略的にこれを有効利用したといえるであろう。しかし、そもそもカトリック教会が聖書に存在しない聖母崇敬を決定した時点から、すでに、民衆慰撫教化の手段として、ヨーロッパ古代の母神信仰の戦略的価値を知り、これを利用していたのである。五世紀に、聖母崇敬を民心慰撫の方法として選択したカトリック教会は、十六、十七世紀に、周縁地域に根強く存在する女性母神の普遍性を借りて、世界布教を実現したと言える。

これは、世界各地域文化の基層に、普遍的な「母性信仰」を看取しているものであるが、裏を返せばつまり、「各地域に普遍的に存在すると考えられる文化的要素(ここでは「信仰・崇拜」)に「適合(適応)」する形で「自己の有する文化的諸要素を紹介(重ね合わせ)」すれば、その「端緒としての理解」は得られやすい、と考えていることを示している。

そして一六世紀に東アジアに到来したカトリック・キリスト教の修道会であるイエズス会は、布教活動を行う上で、方針として「現地文化への適応」を持っていた(5)。その提唱者は東アジア地域の巡察師であったアレッサンドロ・ヴァリニヤノ(中国名は范礼安、イタリア人、一五三九〜一六〇六)であるが、歴史的な観点としては、弟子であるマテオ・リッチ(中国名は利瑪竇、イタリア人、一五五二〜一六一〇)などの、中国で行った活動がその好例である。特に「聖母(子)の図・像」を活用したことに言え、若桑氏は、リッチの死後、中国の教区長となったバドル・ニコラ・ロンゴバルデの書簡を次のように紹介している。

われわれは、新しい改宗者を啓蒙するための本と、画像を必要としております。とりわけ当地の君主らは救世主と処女マリアの画像を求めておりますので、

版画でも絵画でもいいですから当地に送って下さい。特に、マリアの像に關しては、彼らはまだ異教徒であるにもかかわらず、その像にひざまずきひれ伏して Kim Mu Niam Niam と唱えます。それは聖なる母、天の女王という意味です。とりわけわれらのパードレ・ナターレのキリストの生涯とその神秘に關する本があればどれほど益が多いか知れませんか(6)。

ここに紹介されている「パードレ・ナターレ」の著作とは、ヘロニモ・ナダール (Jerome Nadal 一五〇七〜一五八〇、スペイン人。イグナティウス・ロヨラの総会長代理も務める) の『図解版福音書物語 (Evangeliacae Historiae Imagines)』である。この本については、最近「リッチ資料 (Fonti Ricciane)」を編纂したデリア師 (Pasquale M. Delia) の『Le Origini dell' Arte cristiana cinese』を内田慶市氏が翻訳され、知見を示されている(7)。若桑氏、内田氏ともこのナダールの『図解版福音書物語』が、中国では『誦念珠規定』という書名で、「図(絵画)」の多くを中国風に翻案した上で出版されたことに言及されている。

以上で、歴史的な観点から、中国でのキリスト教布教活動において、ヨーロッパのキリスト教文化・教義が紹介される際には、「中国風」への「適応(翻訳)」が行われていたこと、また、それらが端的に現れるものが「図・像」であることも確認できたのではないだろうか。本稿では歴史的な広がりについて、これ以上詳述する余裕はないが、広義に見れば「普遍的な基層的信仰の現れ」として、また、歴史(時代限定)的・狭義にみれば、イエズス会の「適応方針」の例として、「文化的翻訳」が行われて来たことは念頭に置いておきたい。その上で、この「現代の実例」として、本稿では、台湾の現地調査で得た「図・像」を取り上げていくこととした。

二、台北市及び新北市等における天主堂の「聖(母子)像」について

前稿作成の際に行った現地調査以降、それまでに未踏査だった台北市内の教会を含めて、2012年から2014年にかけては、新北市まで調査対象を広げた。これは、今後順次、新北市から台中方面に調査地域を広げ、最終的には台湾全土の教会(天主堂)の悉皆訪問調査を念頭に置いていることによる。この台北市及び新北市における悉皆訪問調査では、これまでに訪問した教会の特徴ともそれぞれ対比しながら、報告を行うこととする。

まず、多くの天主堂に見られる、「一般的な聖母子像」は左のような物である。



55 聖高隆邦堂 (敷地内)



79 聖福若瑟堂 (敷地内)



63 聖方濟沙勿略堂 (敷地内)

これらは同じ形状(製造様式)であり、一見して、「キリスト教の聖母子像」と理解できる。また、左の聖母子像も同様に、製造に關して定型があると思われる分りやすい例である。



66 新店 (大坪林) 聖三堂 (敷地内)



61 聖伯多禄保禄堂 (溝子口天主堂 教堂内)



62 復活堂 (木新路、敷地内)



63 聖方濟沙勿略堂 (教堂内)

彩色した物としてはの「61 聖伯多禄保禄堂 (溝子口天主堂)」(左写真) の像も一般的な聖母子像であり、「聖ルカの聖母」をモデルにしていると考えられる。

右の「63 聖方濟沙勿略堂 (教堂内)」の聖母子像は先の「66 新店 (大坪林) 聖三堂」の像に彩色したものであり、「慈しみの聖母」と言われるモデルに近い。同様の形状の物が「62 復活堂」(左写真) にもあり、必ずしも、各教堂が独自の物を使用しているわけでは無く、それぞれの主任司祭や信者の方々の意向を映しているのではないだろうか。本来であれば、この「聖母子像の選択 (過程)」にこそ、当地の「宗教意識」が反映されていると考えられるが、今後の課題である。

腕に掛けているのは「聖母のロザリオ」であるが、見方によっては「観音の数珠」のようにも見えよう。この「教堂内」の聖母像と上記の「敷地内」の聖母子像とが趣 (容貌等) を異にしていることは分かりやすい。また、この教堂内には「聖ヨセフ」の像も安置されていたが、聖ヨセフの像は、台北市等の各教堂では、聖母 (子) 像ほど目にするのが無かった。各教堂内には当然、イエス像が安置されていたが、聖母 (子) 像もほぼ同じ頻度で安置されていたのは、好対照である。この点は、若桑氏が言う「聖母信仰」と関連があるように思える。ただ、少数例ながらも、この「62 復活堂」には次のような「聖ヨセフ像」が安置されて



62 復活堂 (木新路、教堂内)

以上が一般的な「モデルがヨーロッパ系」の聖母 (子) である (本来であれば、聖母マリアも中東 (ガリラヤ) の人であるはずだが、それは今問わない。現在の「キリスト教」はすぐれて「ヨーロッパ文化」の象徴として認知されていることを前提としているからである)。台北市や新北市の天主堂で見られる聖母子に関する像が、以上のような形状の物ばかりであれば、冒頭で述べた「現地文化への適応」は、台湾では見られないことになるが、実際はそうでは無い。例えば、上で見た「62 復活堂」の「教堂内」にある聖母像は次のような物であった。



7 玫瑰聖母堂 (教堂内)

このように彩色された聖母 (子) 像は、形状は異なるが、左 (写真) の像のような例が他の多くの天主堂にも見られる。



57 耶穌聖体堂
(陽明山天主堂)
(教堂内)

「57 耶穌聖体堂(陽明山天主堂)」に安置されているヨセフ像は、このように

恐らく、一般的な聖ヨセフ像は、「左の写真」のような物であるが、その風貌などが、「ヨーロッパ的」であるのとは大きく特徴が異なっている。これは、「聖母」のみが「現地文化」に適應しているのでは無く、それらに関連する物は多かれ少なかれ、その傾向を有している一証左であるとも言えるだろう。



上智文化事業文物供給社で「土産物」として売られていた木製のマリア像とヨセフ像

これは、前稿で紹介した台湾の「キリスト教関連文物」の販売店で購入した「土産物」である「ヨセフ像」(左写真)と同じ形状の物であり、前稿作成時には実際に教堂で祀られているものがあるとは予想しておらず、「中華風」にアレンジされたヨセフ像を発見し、「現地適應例」を実感できた。



62 復活堂(木新路、教堂内)

おり、「土着文化との適合」を考える良い例であるため、紹介しておく。

これは、朴神父が韓国滞在時に信者の方から贈られた物との事であったが、韓国製は「韓服」を着用し、髪型も韓国風である。この点についても、以前、「韓国の天主教」について報告を行った際、「(天主教)切頭山殉教聖地」に建つマリア像の特徴に言及したことがあるので、併せて参照されたい(9)。
ここまで、若桑氏の所説を念頭に置きながら考察してきたが、イエス像についても言及しておく。「イエス像」に関しては、「中華風にアレンジされた像」を見ることはあまり無かったように記憶している。それは、若桑氏の「普遍的な母性信仰」を裏書きしているのかも知れないが、次章で扱う「図画」では、「イエス像」も十分「現地適應」していると考える。ただ、「像」に関しては、次の例を挙げる



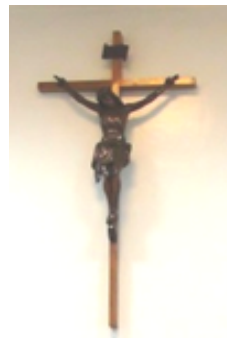
この像のモチーフは「幼子イエス」を抱いている、前述の「慈しみの聖母」と同じである。しかし、これを一見して「キリスト教の聖母子像」と判断するのは難しいのでは無いだろうか。この点については、既にこれまでの報告で触れたことがあるため参照されたい(8)。「幼子イエス」を抱くマリア像については、「55 高隆堂」を訪問した際に、赴任したばかりである韓国人神父(朴圭雨氏)に、次のような聖母子像も紹介して頂いた。



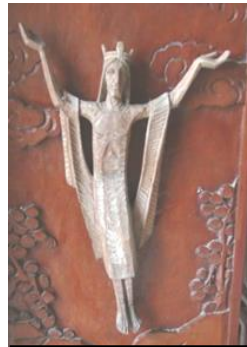
57 耶穌聖体堂(陽明山天主堂)(教堂内)

「ヨーロッパ的」であるが、その他の点で非常にユニークな特徴を持つ教堂であり、本稿や続稿でも改めて取り上げることとなる。まずは、ヨセフ像と同じく、教堂内に安置されていた「聖母子像」であるが、それは左のようなものであった。

にとどめておきたい。左(上)の写真は、調査者自身がミサに預かり、参与観察を行った「78 聖方濟沙勿略堂」の「イエス(磔刑)像」である。この教堂は、こじんまりとした、至極一般的な教堂で、カルロ会のイタリア人神父安吉恩 (Emanuele Angiola) 氏が主任司祭であった。オーソドックスな教堂であったため参与観察の対象に選択したが、この教堂内のイエス像に比べて、左(下)のイエス像は非常に特徴的である。



78 聖方濟沙勿略堂 (教堂内)



91 法蒂瑪聖母朝聖地 (烏來)

この右(下)の写真は、「烏來郷(烏來區)」の教堂にあるイエス像で、容貌や衣服はユダヤ人のようにも見え、恐らく当地の人々を象つたものと考えられる。それは、この「烏來郷」が原住民である「タイヤル(泰雅)族」の居住地域であり、このイエス像の服装などがタイヤル族のそれを模していると考えられるからである。この点についてはまだ十分な調査ができていないため確言できないが、キリスト教が台湾の原住民居住地域において歴史的・現代的にどのような変化・適応を遂げているのかについては、更に調査を進めていきたい。また、この「烏來郷」の天主堂では台湾人である蘇崑勇神父にお話しを伺うことができ、また教堂の作りも特徴的なため、改めて取り上げることになる。

以上、主に「聖像」を取り上げてきたが、台北市地域の各教堂が、バラエティに富み、且つ「それぞれ趣あふれる聖(母子)像」を「自由に」所有していることが看取できたと思う。では、次に「図画」について、見ていくこととする。

三、台北市及び新北市における天主堂の「図画」について

本稿の第一章でも述べた通り、イエズス会の「現地適応」が見られるのはまず「図画」においてであり、その理由としては「像」よりも「加工・製作」しやすい点が挙げられるだろう。歴史的な変遷、実態については若桑氏、内田氏の研究を参照して頂き、本稿では「現在台湾」を以下、取り上げていきたい。

左(上)の写真は蘆洲市にある「80 聖若瑟天主堂」の聖母図であるが、恐らく「無原罪の聖母」であろう。聖母図としては非常にオーソドックスな物である。また、左(下)の写真も同じ図柄である。(同様の図画は各所で目にした)



80 聖若瑟天主堂 (教堂内)



81 聖亞納堂 (教堂内)

このような聖母図が多くある一方で、左のような聖母図も存在している。



82 基隆市主教座聖堂 聖母升天堂 壁面「聖母図」

これは、基隆市の主教座聖堂である「82 聖母升天堂」の建物側壁面に描かれた絵である。この原画は信者の方が描かれたもので、教堂内にも飾られていた。そこには「聖母昇天」の題が付けられていることから、この絵が「聖母」であることは間違いないであろう。ここまで「中華風」にアレンジされた聖母図は「現地適応」の好例と言える。また、同様の例として、左のようなものもある。



88 中華之后堂 (門扉)

これらの図は、「天主堂」に描かれていなければ、「聖マリア」の絵と理解するのは難しいのでは無いただろうか。この他にも、「イエス生誕」をモチーフにした絵も多くの教会に飾られているが、同様のアレンジがなされている。



64 聖神堂(門扉壁面)



58 金山天主教聖母堂 (教堂門扉壁面タイル絵)

右の二枚はヨーロッパ風絵画と見えるが、これと同じモチーフであっても、次の左の二枚は、完全に「中華風」と見えるだろう。



7 玫瑰聖母堂 教堂内 壁掛画



上智文化事業文物 供給社 グリーティングカード

右(下)の写実はキリスト教関連物品を販売している「聖保祿孝女会付設上智文化事業文物供給社」で購入した物である。クリスマス用のカードであろうが、同様に「聖家族」を描いたカードには次の左のような物もある。



上智文化事業文物 供給社 グリーティングカード。聖ヨセフが袈裟をまとっているように見える。

これらを見た限りで言えば、「文化適応」が「外見的」には既に「原型」をほとんどとどめておらず、「現地文化」への習合が「軒先を貸して母屋を取られる」印象さえある。例えば、同様のグリーティングカードには「聖母子」を描いた、左(上)のような物もある。しかし、このグリーティングカードを見た時、思い起こされるのは、「聖母マリアとイエス」というよりは、左(下)の写真にあるような、「註生娘娘」の脇侍なのではあるまいか。これらを厳密に区別せず、「重ね合わせて」見ようとする心性にこそ、若桑氏の言う「普遍的な聖母信仰」があると言えるのかもしれない。



同前グリーティングカード



新竹 城隍廟 註生娘娘 (脇侍十二婆姐)

以上が、台湾における「聖母子」を中心とした、各天主堂などに見られる「図画」の調査事例である。現在の台湾において、様々な点での「融合・習合」が見てとれるが、最後に、前述した「非常にユニークな特徴を持つ 57 耶穌聖体堂(陽明山天主堂)」の天井画を挙げておきたい。この天主堂は続稿でも扱うが、「図・像」の問題でもあるため、ここで示しておく。(説明は枠囲いの中に記す)



57 耶穌聖体堂 (陽明山天主堂) (天井画) これは、「最後の晩餐」を描いた天井画であると思われるが、中心に座る「イエス」以外ほどの人物を当てるべきか、想定できない。このような天井画が描かれているのは、現段階ではこの教堂のみである。

四、結びにかえて

本稿は、前稿に引き続いて行ってきた、台湾におけるキリスト教関連施設への訪問調査の過程報告である。項目を絞って調査例を紹介してきたが、今後の調査を念頭においている例もあるため、まとまりに欠けることは否めない。また、それぞれの来歴の裏付けなど、個々の事例に対する考察もまだ深まっていない段階である。現状は調査事例の報告を主目的とし、若桑氏の言う「普遍的な聖母への信仰」として現れていることの台湾への適用、また一六世紀にイエズス会が東アジア地域の布教において方針としてきた「現地文化への適合」が、台湾では「現在進行形」で現れていることの確認が出来れば、所期の目的は果たせたと考えている。

歴史的な時間を超え、地域的な空間をも超えて、「宗教」が今も活発発地に息づいている様を今後も追いかけていきたいと考えている。

《注》

- (1) 「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(一)」—祖先祭祀をめぐる問題—(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第41号 平成二〇年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(二)」—「天后聖母」について—(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第42号 平成二十一年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(三)」—現地調査における現状と課題—(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第45号 平成二十四年)

(2) 注(1)所掲「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(一)」「天后聖母」について—を参照。ここで、本稿における「図・像」という用語について付言しておく。本来「図・像」は「図像(イコノグラフィ)」と記されるのが一般的であるが、本稿では項目立ての都合もあり「図」と「像」に分けた。このような分け方が「図像学(イコノロジー)」的に正当を欠く懸念もあるが、「図像学」の中の「図・像」に関する分析、ととらえるのが、本稿の意図には最も叶う。「イコノグラフィ」「イコノロジー」については、『キ

リスト教図像学』(文庫クセジュ480、マルセル・パコ著、松本富士男、増田治子共訳、白水社、1970年)、『教会の怪物たち ロマネスクの図像学』(講談社選書メチエ565、尾形希和子著、講談社、2013年、27頁)等を参照。また「聖母(子)」の図像については『カラー版 聖母マリアの美術』(諸川春樹・利倉隆著、美術出版社、1998年)が分かりやすい。

(3) 前稿の繰り返しにはなるが、霜田美樹雄氏は、「ある宗教が広まること、信仰人が増加することはその宗教が教義、礼典において時代的地域的妥当性をもつことであるが、それは他面において異なる地域、時代、民族の諸性向に可能な限り習合(syncretism)できる融通性、弾力性をもつことである。別言すれば、その宗教は教義、礼典において、まず土俗のそれに何らかの形で習合することができなければならない。」と述べられ、また「キリスト教がローマ世界に発展するにつれ、教義、礼典の多くにおいて諸教会に分派対立が継起したことは、それがことなる地域、人々の土俗、慣習に習合したことの反証である。」とも述べられている(『新装版 キリスト教は如何にしてローマに広まったか』早稲田大学出版部、1997年、「序文」及び第9章、12章を参照)。また、ヨーロッパの(カトリック)キリスト教における「土着信仰の吸収」とその図・像への現れについては、馬杉宗夫氏『黒い聖母と悪魔の謎』(講談社現代新書1411、1998年)、特にその第8章を参照されたい。馬杉氏は「黒い聖母像」についても、「このように『黒い聖母』像があり、またその崇拜があった場所は、ケルト民族のドリユイド教時代の聖水、聖石(巨石)、などの崇拜があった場所であることは明白である。すなわち、『黒い聖母』像がある所は、古いドリユイド教の伝統と新しいキリスト教が同化した場所であることがわかるのである。」(同86頁)と述べられており、キリスト教と土着信仰との同化融合を指摘されている。また、前注所掲の尾形氏『教会の怪物たち ロマネスクの図像学』(第七章)も参照。同書は、次稿に予定している「教会に付随する装飾」に言及する際、改めて触れる(特にその「第六章」)こととする。

(4) 若桑みどり氏『聖母像の到来』(青土社、2008年、14頁)を参照。同書は本稿作成に当たって大変示唆に富む内容であり、基本的な視角を与えてくれた。「聖母信仰」とカトリック教会の布教については更に、「信仰の対象であるイエスや聖母の「異民族化」が、教会の方針として一般的に見られるようになったのは、二十世紀の一九三〇年以降であるが、その発端は、本論が対象とする十

六世紀、十七世紀に、「偉大なる伝統文化をもつ」国である日本と中国で、そこに布教した宣教師の創意に始まったのである。」(同書 43 頁) と言い、また「異文化の民衆教化にあたって、この時期以降近代まで地球的な広がり」で「聖母の出現」があった。カトリックは近代文化システムをつくるにあたって「現地の聖母」を必要とした。それらは肌の色、髪の色において、人種的に現地の女であり、衣服によって、民族的に現地の女である。しかし、それはまぎれもなくイエスの母であるキリスト教の「聖母」であった。したがって、民族的聖母の出現とは、一面において「聖母の世界支配」ともいべき現象であった。」(同書 44 頁) と述べられ、「聖母信仰」の普遍性が「宗教的拡大」に大きな影響を持つていたことを指摘されている。同書では更に、日本における「マリア観音」の図・像及び「子安観音」の図・像が「聖母信仰」の日本的現れとして紹介されていく(第八、九章)、大変興味深い。更に第九章の中では、中国的な「聖母信仰」である「子授けの女神崇拜」としての「送子娘娘」「天后娘娘」(所謂「媽祖」)も紹介されており、「聖母」への信仰が様々な形態を取って広がっている事が理解できる。付言すれば、この「媽祖信仰」については、日本に伝わって「天妃様」(青森県大間町)「媽祖菩薩」(神奈川県箱根町)として、今も祀られていることが確認されている。『媽祖に関する調査研究』報告書「長崎県文化・スポーツ振興部、2010 年」。このような「女神(母性)崇拜」の立論の根拠として若桑氏はバハオーフェンの所説を紹介されている(46 頁)、この点については『母権制序説』(J・J・バハオーフェン著、吉原達也訳、筑摩学芸文庫、二〇〇二年)が簡便である。本稿は、若桑氏の所説を「台湾における現代的広がり」においてとらえようとしている一つの試みである。

(5) この点についても、若桑氏は、日本及び中国の状況について「…日本および中国では、布教政策の例外的存在として、征服ではなく、適応/順応策がとられた。すなわち、その地方の伝統文化と西欧文化の融合または西欧文化の伝統的文化への適応が、政策的に行われたのである。これに着想し、実践したのがイエズス会宣教師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ、その弟子マテオ・リッチであった。」(前掲書「序論」)、「近世の異教文化との遭遇では、既述したように、十六世紀の布教開始当初からこの議論は存在し、これを公式文書で最初に記録したのは日本に布教したアレックスサンドロ・ヴァリニャーノであった。ヴァリニャーノは日本と中国のこの「文化的適合 inculturation」を実践して重

要な成果を上げた」(同書 42 頁) と述べられている。このような「(文化)適合」は人類学では「文化翻訳」にあたるようであるが、論者が人類学の専門ではなく、本稿ではそこまでの概念規定を行わないこととする。

(6) 若桑氏前掲書 91 頁。ここで言われている「Xim Mu Niam Niam」とは「聖母娘娘」であろうか。「Xim」が当時のどの漢字を当てるべきかは不明である。書簡の文脈から言えば「聖母」であろうが、「生」と「聖」は現在では普通であるので、「生」の可能性も考えられるかもしれない。

(7) 『東西文化の翻訳「聖像画」における中国同化のみちすじ』(関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 14、内田慶市・柏木治編訳、関西大学出版部、二〇一二年)。この書では『図解版福音書物語』と『誦念珠規定』の図版とを左右見開きで比較しており、原画がどのように「中華風に変化している」のかを分かりやすく示している。ヨーロッパの「聖像画(聖母像)」が「中国化」した痕跡をたどるためにも、若桑書と併せて参照されたい。また同書にはリッチが描いたとされる絵も掲載されており(38 頁)、興味深い。

(8) 「幼子を抱くマリア像」や「現地文化との適合」例としての「註生娘娘」については注(2)所掲の拙稿を参照。

(9) 「韓国における天主教」及び韓国のマリア像については、拙稿「韓国『西学』関連探訪記」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第 44 号 平成二十三年)を参照。

《これまでの調査で訪れた主な天主教系教堂及び施設一覧(2008～2011)》

【台北市内】

- ・ 1 聖母無原罪主教座堂 (103 台北市民生西路 245 號)
- ・ 2 救世主堂(華山堂) (100 台北市忠孝東路一段 112 號)
- ・ 3 聖維雅納堂 (10073 台北市詔安街 236 號)
- ・ 4 耶穌救主堂 (108 台北市柳州街 41 號)
- ・ 5 聖女小德蘭朝聖地 (108 台北市興寧街 70 號)
- ・ 6 復活堂 (108 台北市大理街 175 巷 2 號)
- ・ 7 玫瑰聖母堂 (108 台北市萬大路 405 號)
- ・ 8 聖母顯靈聖牌堂 (10656 台北市延吉街 254 號)
- ・ 9 聖三堂(及び付設幼稚園: 11046 台北市松仁路 228 巷 15 號)

- ・ 10 聖家堂 (106 台北市新生南路二段 50 號)
 - ・ 11 仁愛天主堂 (106 台北市仁愛路三段 34 巷 12 號)
 - ・ 12 聖玫瑰堂 (106 台北市通化街 178 號)
 - ・ 13 聖母聖心堂 (106 台北市和平東路二段 265 巷 9 號)
 - ・ 14 古亭耶穌聖心堂 (10089 台北市辛亥路一段 22 號)
 - ・ 15 聖若瑟堂 (100 台北市同安街 72 巷 19 號)
 - ・ 16 聖瑪竇堂 (104 台北市建國北路二段 64 巷 25 號)
 - ・ 17 長安天主堂 (104 台北市林森北路 73 號)
 - ・ 18 聖多福堂 (104 台北市中山北路二段 51 號)
 - ・ 19 聖道明堂 (104 台北市吉林路 378 號)
 - ・ 20 聖保祿天主堂 (104 台北市北安路 512 巷 1 號)
 - ・ 21 聖若望鮑思高堂 (105 台北市民生東路三段 123 號)
 - ・ 22 聖若瑟堂 (105 台北市八德路三段 158 巷 22 號)
 - ・ 23 中華之后堂 (105 台北市南京東路四段 133 巷 6 弄 9 號)
 - ・ 24 南京東路聖母 (105 台北市南京東路五段 352 號)
 - ・ 25 永春天主堂 (110 台北市松山路 465 巷 2 弄 4 號)
 - ・ 26 法蒂瑪聖母天主堂 (105 台北市富錦街 442-2 號 1 樓) (廢墟)
 - ・ 27 聖母升天堂 (內湖天主堂) (114 台北市內湖區成功路三段 67 號)
(文德女子高級中學: 114 台北市內湖區成功路三段 70 號)
 - ・ 28 耶穌聖心堂(成德天主堂) (115 台北市忠孝東路六段 114 號)
 - ・ 29 聖玫瑰堂(南港天主堂) (115 台北市南港區研究院路一段 113 號)
 - ・ 30 耶穌君王堂(士林天主堂) (111 台北市士林區中正路 264 號)
 - ・ 31 天主之母堂(天母天主堂) (111 台北市中山北路七段 171 號)
 - ・ 32 光啓耶穌會院 (106 台北市敦化南路一段 233 巷 20 號)
 - ・ 33 天主教台北總主教公署 (10679 台北市樂利路 94 號)
 - ・ (劍潭聖母聖心堂: 111 台北市士林區承德路四段 1 巷 25 號。訪問時は既に使用されておらず、移転後のものであった。)
- 【台北市以外】**
- ・ 34 徐匯耶穌會院(併設: 聖家堂會院及び徐匯高級中学校、247 台北縣蘆州鄉中山一路 1 號)
 - ・ 35 中華方濟省會院(明志聖方濟堂) (24350 台北縣泰山鄉明志路三段 26 號)
- ・ 36 本篤會尚義院(243 台北縣泰山鄉明志路三段 96 巷 1 號) (改装・造成中)
 - ・ 37 聖德蘭堂 (621 嘉義縣民雄鄉文化路 28-1 號)
 - ・ 38 聖母無原罪堂 (622 嘉義縣大林鎮東榮街 40 號)
 - ・ 39 天主之母堂(併設: 竹崎天主堂聖嬰幼稚園、604 嘉義縣竹崎鄉民生路 6 號)
 - ・ 40 救世主堂 (616 嘉義縣新港鄉古民街 14 號)
 - ・ 41 聖若望主教座堂 (600 嘉義市民權路 62 號)
 - ・ 42 七苦聖母堂 (600 嘉義市民生北路 92 號)
 - ・ 43 嘉義市聖本篤會院 (600 嘉義市小雅路 545 號)
 - ・ 44 四湖遣使會院及び文生中学(併設: St. Vincent High School. 654 雲林縣四湖鄉中正路 268 號)
 - ・ 45 露德聖母堂 (654 雲林縣四湖鄉中山西路 95 號)
 - ・ 46 天上母后堂 (635 雲林縣東勢鄉東勢西路 87 號。廢墟。)
 - ・ 47 耶穌聖心堂 (632 雲林縣虎尾鎮北平路 77 號)
 - ・ 48 聖三堂 (630 雲林縣斗南鎮新興街 42 號)
 - ・ 49 聖玫瑰堂 (640 雲林縣斗六市中華路 80 號)
 - ・ 50 輔仁大學 (242 台北縣新莊市中正路 510 號)
 - ・ (51 耶穌會院 613 嘉義縣朴子市文明路 1-9 號。住所地に所在していません。)
 - ・ (52 中華聖母主教座堂: 70047 台南市開山路 195 號。二〇〇五年に訪問。)
- 《前記に続いて、訪問したカトリック・キリスト教系教堂及び施設一覽 (2012〜2014)》
- 【台北市内・新北市】**
- 53 (天主教手冊 = B02-31) 聖彌額爾堂(社子天主堂) (111 台北市士林區延平北路 6 段 175 號)
 - 54 聖十字架堂(蘭雅天主堂) (111 台北市士林區德行東路 200 號)
 - 55 (天主教手冊 = B02-34) 聖高隆邦堂 (112 台北市北投區大業路 695 號)
 - 56 聖體堂(石牌天主堂) (112 台北市北投區石牌路 2 段 90 巷 20 號)
 - 57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂) (111 台北市華岡路 2 號)
 - 58 金山天主教聖母堂(1961) (208 台北縣金山鄉中正路 25 號)
 - 59 法蒂瑪聖母朝聖地(1889) (251 台北縣淡水鎮清水街 218 號)
 - 60 耶穌君王堂(252 台北縣三芝鄉長安街 59 號)

- 61 (天主教手冊=B02-40) 聖伯多祿保祿堂(溝子口天主堂)(116 台北市木柵路 1 段 58 巷 24 號)
- 62 復活堂(116 台北市木柵路 2 段 2 號)
- 63 聖方濟沙勿略堂(117 台北市羅斯福路 5 段 150 巷 25 號)
- 64 聖神堂(117 台北市文山區景隆街 36 巷 3 號)
- 65 石碇天主堂(223 台北縣石碇鄉石碇東街 141 號)
- 66 聖三堂(大坪林)(231 台北縣新店市寶安街 26 號)
- 67 中華聖母堂(231 台北縣新店市中正路 367 號)
- 68 聖若望天主堂(中華殉道聖人朝聖地)(220 台北縣板橋市南雅西路一段 25 號)
- 69 聖母聖心堂(220 台北縣板橋市中山路二段 255 巷)(光仁中学校内付設)
- 70 聖母升天堂(234 台北縣永和市自由街 69 號)
- 71 (天主教手冊=B02-50) 天主之母堂(235 台北縣中和市景平路 329 巷 1 弄 5 號)
- 72 聖安多尼朝聖地(236 台北縣土城市中央路 4 段 311 號)
- 73 聖母領報天主堂(23742 台北縣三峽鎮中園街 71-1 號)
- 74 耶穌聖心堂(238 台北縣樹林市中山路一段 154 號)
- 75 陶士天主堂(239 台北縣鶯歌鎮鶯桃路 97-1 號 4 樓)
- 76 聖母聖心堂(241 台北縣三重市大同北路 115 巷 1 號)
- 77 聖保祿堂(242 台北縣新莊市新興街 1-1 號)
- 78 聖方濟沙勿略堂(243 台北縣泰山鄉福泰街 22 號)(2013.7.13 参加。)
- 79 聖福若瑟堂(2447 台北縣林口鄉忠孝路 594 巷 13 號)
- 80 (天主教手冊=B02-60) 聖若瑟天主堂(247 台北縣蘆洲市中正路 70 號)
- 81 聖亞納堂(248 台北縣五股鄉民義路 1 段 183 巷 3 號)
- 【基隆市】
- 82 (天主教手冊=B02-62) 聖母升天堂(201 基隆市信一路 66 號)
- 83 耶穌聖心堂(203 基隆市西定路 166 號)(基隆市・輔仁大学の付属高校、中学、小学、幼稚園の構内にある教堂。)
- 84 和平之后堂(20243 基隆市祥豐街 43 號)
- 85 暖暖天主堂(205 基隆市暖暖區暖中路 2 號)
- 86 聖耀漢堂(206 基隆市七堵區南興路 35 號)
- 87 聖方濟堂(221 台北縣汐止市大同路二段 637 號)
- 88 中華之后堂(224 台北縣瑞芳鎮民生街 35 巷 3 號)

- 89 四腳亭露德聖母朝聖地(224 台北縣瑞芳鎮瑞竹路 32 號)
- 90 (天主教手冊=B02-70) 聖尼各老堂(232 台北縣坪林鄉坪林天主堂(坪林區水脚脚 62 號)(2013 年工事中))
- 91 法蒂瑪聖母朝聖地(233 台北縣烏來鄉烏來村溫泉街 90 號)
- 92 耶穌聖心堂(30242 新竹縣竹北市中正東路 431 號)
- (住所は実際に訪問当時に確認した場所。また台湾で発行されている『台灣天主教手冊』(台灣地區主教團秘書處編譯、天主教教務協進會出版社、二〇〇四、二〇〇七、二〇一〇、二〇一二、二〇一四)も参照した。台湾では 2012 年 12 月にそれまで「縣」であった各地域が「區」に編入され、直轄市としての「新北市」に改称された。ここに挙げた各天主堂の住所も、現在は「縣」が「區」になってゐる。)

・本報告作成にあたっては、「国立高等専門学校機構在外研究員区分(B)」による派遣助成を受け、台湾国立台北科技大学(建築系楊詩弘助理教授指導)での滞在研究に従事することが出来た。また、従前同様、現地調査過程では台湾師範大学の藤井倫明氏・金培懿氏に特段の配慮を賜った。併せてここに、特に記して謝意を表したい。

・本報告は、文部科学省科学研究費補助金「基盤研究(C)」(課題番号 24520047「来華イエズス会士がもたらしたもの—『天学初函』に見る異文化概念の理解と齟齬—」2012～2015 年度)による研究成果の一部である。

(二〇一四年十一月十日 受理)